

清涼飲料としての緑茶～緑茶飲用の変遷～ Green tea as a soft drink

笹目正巳
SASAME Masami
株式会社伊藤園
ITO EN, LTD

① 茶及び茶飲料市場について

緑茶のリーフ茶市場は「緑茶離れ」といわれて久しいが、ペットボトルの緑茶飲料が定着している事からも言い難い側面もある。確かに近年緑茶リーフ市場は減少傾向にあるが、昨年のコロナ禍、家飲み需要から緑茶ティーバッグなどへのニーズが高く、緑茶飲料市場においては各社力を入れており、2000年に比べて2倍近く増加している。

② 緑茶の屋外飲用の変化

ペットボトルの緑茶飲料が発売され、外出時に緑茶が飲まれるようになったと思われるが、以前から工夫して屋外での喫茶は行われていた。古くは江戸時代、「茶弁当」と呼ばれる屋外用茶飲みセットが使われていたり、1889年には駅弁にあわせ「汽車土瓶」が販売された。この汽車土瓶の大半は、駅でゴミとして処分された。現在のソフトドリンクの容器同様、「使い捨て」の考えは、この頃から存在していた。屋外飲用は更なる変化を遂げ、現在のソフトドリンクによる飲用へと繋がっていった。

③ 緑茶の淹れ方の変化

緑茶を淹れて飲むという急須を思い浮かべるが、茶の飲用方法は様々あった。

日本に初めて伝えられた時の茶は中国の団茶で、保存の利便性と持ち運び易さ等から固められたものであった（煮だして飲む）、12世紀、栄西が宋から持ち帰り薬効とともに喫茶として広がり、16世紀茶の湯文化として抹茶の普及が進む（粉にして飲む）。一方、庶民には煎じ茶として飲用され、19世紀には急須の普及とともに煎じ茶から煎茶とつながっていく（湯に浸してエキスを飲む）。現代のペットボトルの緑茶飲料もニーダー方式やドリップ方式、清澄・濁り系など製造方法が様々あるが、いつの時代も喫茶方法・用途にあわせた作り方が求められてきた。今後に向けては飲料用の原料茶の製法も求められる。

④ 茶の飲用理由

茶は今でこそ、嗜好飲料として位置づけされているが、食用、薬用、飲用など様々な理由で摂取されていた。茶粥や、島根県のボテボテ茶、富山のバタバタ茶等様に穀物類と一緒に食される事も多く（食由来）、栄西は喫茶養生記と共に仙薬として日本に伝え、その後ビタミン、カフェイン、テアニン、ポリフェノールなどの効能も期待されてきた（薬由来）。日常的に飲用する茶の健康への期待、特保・機能性飲料につながっている。

まとめ

緑茶飲料がソフトドリンクとして受け入れられ、緑茶の飲み方の一つとして定着した。

茶は今までも製法、淹れ方、飲まれ方など変化しながら飲まれてきた。ソフトドリンク緑茶の製造技術も日々進化しており、今後も新たな茶の嗜好性・提供方法が求められる。